

『国語教育誌』の書誌と記載内容概要(一)

有働 裕

本稿は、国語教育学会編『国語教育誌』の目次と書誌を示し、加えて掲載論文・記事の概要を記したものである。

『国語教育誌』は昭和十三(一九三八)年から昭和十六年まで毎月刊行された、A5判の各号三十頁弱の機関誌である。会長の藤村作をはじめとして、同会理事の島津久基、西尾実らが積極的に執筆している。刊行のいきさつについては、第一号の「お願ひ」(二十六頁)に次のように記されている。

本会は「国語教育学会会報」を本会編輯の岩波講座「国語教育」の付録として刊行し、既に第十二号を昭和十二年九月を以て発行したが講座終了と同時に、これを独立し月刊雑誌として刊行、本会設立の根本義に徴しその任務遂行の目的に立脚して、会員相互の連絡、研究発表機関とすることとしました。この際全国津々浦々に散在する全会員諸氏の御賛同と御支持を特に願ひ申し上げます。

次第であります。

国語教育学会は、昭和九年一月に創設されている。この学会の創設には藤村作が中心的役割を果たしており、国策に合致した「思想善導」の手段として「古典文学」を役立てることが大きな目的の一つとなっている。それは、直接には演劇「源氏物語」上演の警視庁保安部による禁止(昭和八年十一月)を契機とするものと思われる。すなわち、国文学やその研究が時局にあわぬ厭戦的なものと見なされかねない状況にあることに危機感を感じた藤村が、いかに国策において国文学が有益であるかを訴えようとしたと理解できる(詳しくは拙著『源氏物語』と戦争―戦時下の教育と古典文学―(二〇〇二年・インパクト出版会を参照のこと)。

しかしながら、この雑誌は戦時下における国語国文学界・国語教育学界の動向を知るための好資料であり、詳細に検討

することで各研究者の時局に対する姿勢を把握することができ。ゆえに、戦時下の国語国文学・国語教育研究者の戦争責任の問題を検討する際の基礎資料となるとの判断から、このような資料紹介を行うこととした。

凡例

○漢字の字体については、できるだけ現行の字体に改めた。書誌情報の本来の在り方からすれば原本の字体に忠実であるべきであるが、できるだけ読みやすい形で提供し、できれば若い世代の方に国語教育・国文学関係者の戦争責任の問題について関心を持っていただきたいという期待を込めて、このような形とした。

○本稿は、表紙目次、執筆者紹介、奥付、広告の記載内容を転記し、「国語教育学会消息」の見出しのみを記載した。「国語教育学会消息」の記載内容や編集後記にも重要な情報が含まれてはいるが、紙面の都合上止むを得ず省略した。

○掲載記事の内容については、「記載内容概要」において簡略に紹介した。

○『国語教育誌』の記載内容には、人名や書名、日付等に誤りが含まれている可能性があるが、とりあえず誌上の記述を重視し、訂正は行わなかった。

○第一号から第六号に関しては架蔵のものを底本とした。

◇第一号

《表紙目次》

第一巻 第一号 昭和十三年 一月号

「新しい」と「堅実」・・・・・・・・・・藤村 作(二)

口語研究の不備・・・・・・・・・・東條 操(三)

意義学に於ける言語史の問題・・・・・・・・・・齊藤清衛(六)

国語教育試論・・・・・・・・・・藤田徳太郎(一一)

石井庄司 藤田徳太郎

大久保正太郎 西尾 実

鈴木睿順 野島秀義

国語教育時評・・・・・・・・・・玉井幸助(一六)

新刊紹介・・・・・・・・・・(二〇)

国語教育学会消息・・・・・・・・・・(二三)

《執筆者紹介 p.25》

石井庄司氏 東京女子高等師範学校教授

大久保正太郎氏 東京市本郷区第一実業女学校教諭

齊藤清衛氏 文学博士・本会評議員

鈴木睿順氏 東京駒込中学校教諭

玉井幸助氏 東京高等師範学校教授本会理事

東條 操氏 学習院教授・本会理事

藤田徳太郎氏 浦和高等学校教授・本会評議員

藤村 作氏 東京帝国大学名誉教授 文学博士・本会会長

西尾 実氏 東京女子大学教授・本会常務理事
野島秀義氏 東京市汐見小学校訓導

《国語教育学会消息》

国語教育学会新役員／国語教育学会理事会／上田萬年博士御
逝去／日本諸学振興会第一回国語国文学会／日本諸学振興会
国語国文学公開講演会／国語教育学会研究部例会／研究部第
九回例会予告

《奥付 p 26》

昭和十二年十二月廿八日印刷

昭和十三年一月一日発行

(第一巻第一号)

定価金拾銭(郵税三銭)

編集兼発行者 東京市渋谷区幡ヶ谷本町一ノ二七 藤村 作
印刷者 東京市神田区神保町一ノ四四 戸根木豊太郎
印刷所 東京市神田区神保町一ノ四四

定価普通号 一部 拾銭 郵税三銭 一年分 壹円(増大
号・送料共・但前金直接御申込に限りませ)

御注文規定

▽本誌の御注文は一切前金にお願ひ致します。
▽本会々員はすべて一年分金壹円をお納入願ひます。
▽御送金はなるべく安全至便な振替を御利用ください。振替

東京六五八四二番

▽郵券代用の場合は一割増に願ひます。

▽一切の御照会は郵券封入又は往復はがきで願ひます。

発行所 東京市渋谷区幡ヶ谷本町一ノ二七 国語教育学会

電話四谷(35)六七〇五番

振替口座東京六五八四二番

《広告》

長田新訳『フレイベル自伝』岩波書店(裏表紙見返し)

東京帝国大学国語国文学研究所編輯『国文学の根本問題 国
語と国文学 十月特輯号』至文堂(裏表紙)

《記載内容概要》

巻頭言の「新しい」と「堅実」(藤村作)は、「新しい」教
育よりも「堅実」な教育を推奨するもの。大正時代以来の自
由主義的な教育運動に対する批判と思われる。

口語研究の不備(東條操)は、日本語の海外普及に関する
座談会に出席した際の感想を述べたもの。辞書、文典、会話
書の選定が話題となったことを受け、口語研究の不備を訴え
る。辞書の大半は文語の辞書で、外国人のみならず日本人の
ためにも慣用口語辞書が必要である。にもかかわらずそれが
進まないのは、「標準語彙」の要求が学界に起こつてゐないた
め」だとする。口語文典は多数発行されてはいても多くは文

語文典直訳式であつて、現代口語に即応していない。また、国定読本が現代語会話の標準的テキストとされてはいるがこれは読本的口語であり、そのまま地方人・外国人が用いても生きた会話とはならないことを指摘。さらに敬語法や男女老若各職業ごとのそれらしい会話の必要性を述べる。そして、日本語の海外進出も考慮し、「正しい日本語の標準語」樹立のために生きた現代口語への注視が必要だと述べる。

意義学に於ける言語史の問題（齊藤清衛）は、小学国語読本に収められている教材文に文語表現と口語表現、和語・漢語・外来語などが混在していることを例示し、教師が「調子」や「感じ」を理由にそれを処理してはならないと戒める。そして、それぞれの表現には成立に至る歴史的過程があり、各時代の言語生活における精神的検討が必要で、それは国語学者の責務であるとする。また、言語や文字に実利性や利便性ばかりを求めるのは誤りであり、日本語特有の直観的な表現や詩的表現の特異性などをふまえての説明が必要であると述べる。

国語教育試論は六名によるコラム的な文章。**小学国語読本の完成と中等教育**（石井庄司）は、画期的な新しさを備えたサクラ読本の使用があと一年で六年生の段階まで達することをおまへ、字体や送り仮名の統一、教材の取り扱い方などで、中等教育の側での準備を促す。**解釈学的方法**（大久保正太郎）は、読方教育における解釈学（解釈理論）の普及を評

価する一方で、文章の性質を無視した画一的取り扱いや学習者の発達段階の無視、必要以上に煩瑣な分析、主観主義への転落等の傾向への警告を述べたもの。**国語教師の道**（鈴木睿順）は、初等国語教育に比べて中等国語教育の研究が大きく遅れているとし、その指導者の意識の変革を訴える。**国語教育は総合教育**（藤田徳太郎）は、現在の国語教育があまりに専門的に分化しすぎているとし、読み・書き・綴りを関連させ、さらに数学や自然科学までも包括した未分化の状態に還元して国語教育を見直すべきだとする。**解釈に於て求められる具体性**（西尾実）は、小学国語読本巻十に収められた詩「霧」について、『小学国語読本総合研究』での井上超の理解を批判し、主題・構想・叙述についての自らの見解を述べたもの。**実践者の本領**（野島秀義）は、実践者の心得として根本的なものは児童生徒に対する誠実と情熱だとする。

国語教育時評は玉井幸助の執筆で、九つの論文・記事が扱われている。**土井忠生「国語の特質について」**（学校教育）については、日本語の音韻・アクセント・文法等の特色を、古来「言挙げせぬ」ことを理想とする国民性に由来するとしていることを評価。その一方で、「我が国の国語は、如何なる国民の言語であるか、其の国民は人類文化の指導の上に如何なる使命を担うてゐるか、その自覚を明らかにし」なければならぬと批評している。**石山脩平「小学国語読本巻十を讀む」**（教育文化）については、新読本巻十の文章表現や内

容の不備を厳しく批判する石山に對して、やや懷疑的な感想を述べる。輿水実「直観的と觀察的」(教育国語教育)に對しては、芸術的直観と科学的觀察の相互循環を重視する論旨に賛意を示している。金原省吾「純情」(実践国語教育)については、純情を昔から「まこと」と呼ばれたものと同じと解し、「日本の性格が、純情の集中と純情の流動の二方面を以て日本人の実生活に表現せられてゐることを論じ」てゐる、と紹介する。志田義秀「小学国語読本の千代の句」(実践国語教育)については、読本に採用された加賀千代女の句の評釈と伝記研究および作風を論じて、その句が児童を俳諧に親しませる上で恰好のものだと述べてゐることを紹介し、「本課の教授指導上有益な文」であると評価してゐる。滑川道夫「課題制作再検討」(実践国語教育)については、綴方教育における自由選題の導入の意義を認めつつ課題作文の再評価を試みた論として紹介し、「此の論の提唱には絶大の賛意を捧げる」と述べてゐる。佐久間鼎「口語文の用語と語法」(国語運動)については、現代口語文を生き生きとしたものにするために文語や方言および外来語の使用を抑制して適切かつ純粹な国語の語彙を豊富にするべきだという趣旨には賛同しつつも、「その実行が非常な困難を伴ふ」ことを指摘。勝部謙造「「読む」の進行とその指導形態」(国語教育)に對しては、「読む」ことの本質的構造を心理面から考察したものと紹介し、「国語教育の實際に當る者に對して有益な示唆を与

へるもの」と高く評価。原田直茂「新読本巻十を手にして」(学校教育)は新読本巻十の各教材に對する感想を述べたもので、「國民精神を高揚するもの」が基調となりしかもそれを「理智的」に述べた文章だと指摘してゐることについて、「實際教授上に良い示唆」を与えるものと評価してゐる。

新刊紹介では四冊の書籍を扱う(紹介者名は記されていない)。国語教育学会編「小学国語読本総合研究卷十」(岩波書店)は、巻頭に教科書監修官井上越の編纂概説を置き、各課を「要説」(大岡保三・井上越執筆)、「解釈」(西尾実・島津久基・玉井幸助執筆)、「指導」(全国の訓導十一名の執筆)、「参考」(関係諸学専門家十五名の執筆)の四部門に分けて解説する体系的な指導書。「教育界に於ける画期的業績」「必読すべき無二の指導書」として高く評価されてゐる。大木顯一郎・清水幸治共著「綴方教室」(中央公論社)については「赤い鳥」派の綴り方における經典とも称すべき書」で、豊田正子の綴方作品、著者の指導観や鈴木三重吉の選評、綴方の指導案と指導形態等を掲載した、「綴方に関心を持つ人々の必読の書」だと紹介。滑川道夫著「童詩読本」(啓文社)は、「児童のポエジーを生活的に育成しようとする根本的意図」のもとに著された書であり、「児童の読物として、詩話形態をとり、恰も自己のクラスにでも語り聞かせるかのよう」に平易に書かれてゐる」のが特徴。「真に国語愛に目覚めた児童を育成」する「有力な指針」として高く評価されてゐる。

玉井幸助訳『現代語訳枕草子』（非凡閣）は現代語訳国文学全集中の一巻として刊行されたもので、その文章には「原文さながらの風韻」が備わっていると評価。このような書物は「歴史的日本の自覚と現実日本の認識に最も重要な役割を演ずる」ものであり、「対外的には日本の真相を広く世界に紹介するに最もふさわしい」一冊であるとされている。

◇第二号

《表紙目次》

第一巻 第二号 昭和十三年 二月号

- 巻頭言 藤村 作 (二)
 防人の歌 宮崎晴美 (三)
 小学生と文書構造への興味 片岡良一 (八)
 国語教育試論 (一四)
 城戸幡太郎 大石逸策
 篠原利逸 西尾 実
 国語教育時評 岩永 胖 (二八)
 中等学校入学試験国語科問題の検討批判 (二二)
 国語教育学会消息 (二七)

《執筆者紹介 p 26》

岩永 胖 川越中学校教諭・本会評議員

- 大石逸策 東京市小岩小学校訓導
 片岡良一 法政大学教授・本会評議員
 城戸幡太郎 法政大学教授
 篠原利逸 東京市神谷小学校訓導
 西尾 実 東京女子大学教授・本会常務理事
 藤村 作 文学博士・本会会長
 宮崎晴美 府立高等学校教授・本会理事

《国語教育学会消息》

国語教育学会研究部例会／研究部第十回例会予告

《奥付 p 27（裏表紙見返し）》

昭和十三年一月廿九日印刷発行

昭和十三年二月一日発行

（第一巻第二号）

※以下、前号と同じ。

《広告》

石原純著『科学と社会文化』、和辻哲郎『面とベルソナ』岩波書店（裏表紙）

《記載内容概要》

巻頭言の老熟練達を尊重せよ（藤村作）は、帝人事件の被害に対する無罪判決は経験不足の年若い検事・判事らによる

誤りであるとし、法曹界・教育界ともに老熟の年齢の尊重を訴えたもの。

防人の歌（宮崎晴美）は、万葉集の防人の歌における国家的・軍人的精神について言及したものだ。まず今奉部與會布の「今日よりはかえりみなくて大君の醜の御楯と出で立つわれは」（巻二十）を取り上げ、地位の低い無名の武人による歌でありながら万葉集を代表する秀歌であるとし、その「滅私奉公の信念」「尽忠報告の精神」「剛健な国家的精神」を絶賛する。次いで防人の歌全般についての解説を述べ、その中には「防人に行くは誰が夫と問ふ人を見るが羨しき物思もせず」「防人に立ちし朝明の家な門出に手離れ惜しみ泣きし児らはも」といった妻子との別れの悲しさを詠んだものがあることにも言及するが、「かうした人間的な個人感情も、それが大君の御為であり、御国の為には潔く忍ぶということに於て、なほ一段の光彩を発揮するものである」という形で肯定的に説明されている。

小学生と文書構造への興味（片岡良二）は、尋常小学読本巻第十二所収の教材「鳴門」「商業」「チャールス・ダーウィン」等について言及。「鳴門」は単なる叙景詩にとどまらず、「人間絶対を信ずる現代の思念」を読み取るべき教材であり、同様に、「商業」を扱ったならば「商業といふものの本来の性質」の把握にまで至るべきであるとする。また、「チャールス・ダーウィン」については、その学問と人生における情

熱を読み取る上で、読本の段落分けには問題があることを指摘する。

国語教育試論は六名によるコラム的な文章。**国語の歴史性と陶冶性**（城戸幡太郎）は、国語における日本の民族性継承に関するもの。言葉の意味は客観的精神として存在していることを前提とし、小学校の教育は、「型を破らず国文教育」ではなく、まず「型に入れる国語教育」でなくてはならないとする。**方法以上**（篠原利逸）は芦田恵之助の授業を見学した際の感想。児童の真摯な学習態度と無言のうちにそれを方向付ける芦田の態度を賛美する。**方言について**（大石逸策）は、方言を愛することは故郷を愛することであり、祖国や国語を愛することにも通じるとし、標準語万能の発想を批判。**指導過程の問題**（西尾実）は、大正時代に下火になっていた指導過程論が近年論じられるようになったことを評価し、「（一）自由読（二）指名読（三）問答」からなる単位をいかに組み合わせるかということ今日の課題として提示する。

国語教育時評は岩永胖の執筆で、佐藤末吉「文の指導と情調の感得」（実践国語教育）・金原省吾「知見」（国語教室）・垣内松三「韻文研究の観点と立場」（コトバ）・坂本裕「読方教室批評の問題」（実践国語教育）の四編を扱う。解釈学の立場を標榜する佐藤も「知見」による「解明」を学者の任務とする金原も、ともに実践家としての立場に対して

距離を置こうとする姿勢をとっている。岩永はこれを「学問と実践の分離」、「知見の実践に対する圧倒的優位」を示す「局外批評」として批判し、また、そのように蔑視されてしまふ「実践」の在り方に対しても反省を促す。一方、国語科教育における哲学的研究と教育的立場の合一を提唱する垣内の論に対しては賛意を示し、さらに「総ての教育は実績を多く挙げようとする経営的努力」が必要であるとする坂本の主張を評価して、「国民精神昂揚の波濤の中」にある現在、国語科教育は「理論と実践の合一」を目指すべきだとする。

中等学校入学試験国語科問題の検討批判―昭和十二年三月施行の各校問題を中心として―は、藤村・西尾・篠原・増田・江藤・稲葉・加地・小林・今・星・岡本・鈴木・加藤・岩永・東條による座談会の記録。小学校側・出題者側・視学官など各方面からの発言を記す。

◇第三号

《表紙目次》

第一卷 第三号 昭和十三年 三月号

巻頭言 藤村 作 (一一)

芭蕉の敬神 佐藤幹二 (二三)

一つの感想 近藤忠義 (一六)

国語教育試論 (一四)

西尾 実 國井 恒

石山脩平 山田清人

加藤 因

国語教育時評 篠原利逸 (一六)

声写実相 古田 拓 (一八)

新刊紹介 (二四)

国語教育学会消息 (二六)

《執筆者紹介 p 25》

石山脩平氏 東京師範学校教授

加藤 因氏 東京市立目黒高等女学校校長、本会評議員

國井 恒氏 栃木県師範学校付属小学校訓導

近藤忠義氏 法政大学教授、本会理事

佐藤幹二氏 女子学習院教授、本会理事

篠原利逸氏 東京市神谷小学校訓導

藤村 作氏 東京帝国大学名誉教授、文学博士、本会会長

古田 拓氏 愛媛県師範学校附属小学校主事

西尾 実氏 東京女子大学教授、本会常務理事

山田清人氏 東京市毛利小学校訓導

《国語教育学会消息》

垣内松三氏還暦記念／国語教育学会研究部例会／小学国語読本総合研究卷十一／小学国語読本総合研究

《奥付 p 27 (裏表紙見返し)》

昭和十三年三月五日印刷発行

昭和十三年三月十日発行

※以下、前号と同じ。

(第一卷第三号)

《広告》

国語教育学会編『小学国語読本総合研究』卷一、三、五、七、

九、十一 岩波書店 (p 21)

安倍能成ほか編輯『鈴木三重吉全集』全六卷 岩波書店 (裏表紙)

《記載内容概要》

巻頭言の学制の改定 (藤村作) は、教育審議会による教育制度の検討進行に対し、「発展的日本帝国の大局に立つて、全教育体系を見通す」ことの必要性を訴え、各界の利害の立場からの発言を牽制するもの。

芭蕉の敬神 (佐藤幹二) は、「何の木の花とは知らず匂かな」の句を中心に、芭蕉がその生涯に何度も伊勢神宮を参拝したことに注目し、「陰逸の詩人のやうに考へられてゐる芭蕉に、神崇祇敬の情熱があり、国民精神的のものを生かすきつてゐる点」を強調するもの。

一つの感想 (近藤忠義) は、日比谷図書館の改築費不足に伴う閉鎖事件を発端として、文化を擁護するものが「非国民

呼ばはり」されがちな昨今の風潮を憂い、とかく芸術家が政治から乖離して隱者的傾向を取りがちな日本の伝統を批判する。「時局に籍口して、學術の世界に当然護られねばならぬ独立性をも否定し、すべて特定の政治―それも甚だ無知蒙昧な、薄つべらな理解に拠つて―の線に隸従させようとして、破廉恥な放言をする似非愛国者が、近來統々現れつつある」といった記述に、近藤の反骨精神を見出すことができる。

国語教育試論は五名によるコラム的な文章。**指導操作の基本的なるもの (西尾実)** は、従来の通読・精読・達読の指導過程を「上からの指導」として批判し、児童の学習に注目した「自由読 (個人学習) ・指名読 (児童の相互批評・教師の正誤指導) ・問答 (共同学習) の三者の組み合わせによる指導様式を推奨するもの。**国語教育学建設の要望 (石山脩平)** は、「国語教育論」が「国語教育学」へと発展するためには根柢と体系性が必要であるとし、その点で「国民としての児童が国民的生活により益々国民化せられるために国語を学習する」ことを目指す近年の傾向を称賛し、「日本学」が国語教育の基礎づけに貢献することを歓迎するもの。**教授を超えて教育へ (加藤因)** は、中等学校の作文教育では、瑣末な添削や批評以前に良い文章に触れることが重要であることを述べ、国語の「教授」を「教育」へと高める必要を訴える。**実践と理論との相補性 (國井恒)** は、文字どおりその両者の相互補完の必要性を抽象的に述べたにとどまる文章。綴

方作品の構成的研究（山田清人）は、「綴方作品の科学的研究」の在り方として、西尾実の「綴方作品解釈の方法論」を「文学的分析法」としてひとまず推奨し、その様式の類型を考察した「構成的研究」に向かうことの必要性を説く。

国語教育時評は篠原利逸の執筆で、冒頭から「今や、教育全般の上に日本の昂揚の警鐘が雄々しくも乱打されつつある現状」にあると述べる、時局色の濃い文章。まず、「今こそ欧米依存の教育を清算して日本の教育を昂揚し教育が崇高なる精神を有する国土を養成するという本来の使命に帰る絶好の機会である」という清原貞雄の文章（教育国語教育・二月号巻頭言）を引用する。それを、「国語」を「国民精神」・「国民文化」・「国民生活」を推進する「動力」としてとらえるという垣内松三の見解（形象論序説・一月十一日発行）と結びつけ、従来の国語教育の主流であった西洋依存の解釈学・表現学は、「日本解釈学乃至は日本表現学」に改められる時が来たとする。さらに垣内の「理論と実践とを超越して一道の白路を見出すところに実践の道」があるという記述（国語教育講話）を引用する一方、芦田恵之助の「七変化」の教式を評価する勝部謙造の「文の虚構と「読む」の進行段階」（国語教育・一月二月号）の執筆態度を、「学者的態度を十全の意味において清算しきつて」いないと批判する。

声写実相（古田拡）は、道元の「学道用心集」や露伴の「猿蓑」の評釈を例に、一字一句の重みを説いた随想。

新刊紹介は二冊の書籍を扱う。垣内松三『形象論序説』（不老閣書店）は、「その形象理論中の主要論文五編を網羅し、最も端的にその大要が把握し得られるやうな組織に編纂して、これを晩翠会紀要第二冊として刊行したもの」で、国語教育に従事する者がまず学ぶべき書であると篠原利逸によって紹介されている。小山龍之輔『文芸鑑賞新講』（時潮社）は、西洋の芸術心理学をふまえて鑑賞に在り方を随想風に論じたもの。紹介者の鈴木春順は、「国文学界に於ては鑑賞の学的位置は危機に瀕してゐる」中で、「実践を出発点として鑑賞学を樹立しようとする」筆者の熱意を称賛。

◇第四号

《表紙目次》

第一卷 第四号	昭和十三年 四月号
巻頭言	藤村 作 (一一)
初心不可忘	久松潜一 (二三)
都と田舎	能勢朝次 (八)
国語教育試論	森本治吉 (一一)
石原 純	
島津久基	山本善太郎
西尾 実	
国語教育時評	石井庄司 (一八)

新刊紹介・・・・・・・・・・・・・・・・（二二）
国語教育学会消息・・・・・・・・・・・・・・・・（二四）

《執筆者紹介》
記載なし

《国語教育学会消息》
国語教育学会理事会／国語教育学会顧問推戴／国語教育学会
理事会／小学国語読本総合研究

《奥付 p 27（裏表紙見返し）》
昭和十三年四月五日印刷発行
昭和十三年四月十日発行
※以下、前号と同じ。

（第一巻第四号）

《広告》

国語教育学会編『小学国語読本総合研究』巻一、三、五、七、
九、十一 岩波書店（p 17）
兼常清佐著『日本の言葉と唄の構造』岩波書店（裏表紙）

《記載内容概要》

巻頭言の知育の不徹底（藤村作）は、「軍隊教育の最大の
長所」を「幾度も反復し、且つ実践せしめて、その知をその

人の靈にまで植けるところにある」とし、学校教育における
知育の徹底を説くもの。

初心不可忘（久松潜一）は、「日本的な精神」の形成にお
いて「修行」や「道」という概念がいかに大きな役割を果た
したかを『徒然草』や世阿弥の能楽論を例に解説し、教育に
おいては個性よりも型を重視すべきだとする。そして、「初
心不可忘」は「今日に於ける学問や道の修行に於て最も学ぶ
べき態度である」と結ぶ。

都と田舎（能勢朝次）は、世阿弥の能楽論を用いて油断な
く精進することの重要性を説くもの。

国語教育試論は「新読本巻十一の活用」という副題が付さ
れ、五編のコラム的文章が載る。科学的教材への注意（石原
純）は、「電話の発明」や「雪のさまく」「月の世界」を例
に科学的な考え方の習得の重要性を説く。古事記と源氏物語
（島津久基）は、これらの小学校教材化に対して「国民教化
の向上を心まことに慶祝したい」と述べ、他の教材と関連さ
せて「少国民達に皇国日本の国初とその尊い歴史と精神とを
的確に体認せしめ、一面国語と日本精神との不可分性を力説」
する努力を教師に求める。そして、自ら『小学国語読本総合
研究』巻十一に掲載した文章を再掲し、「原古源氏物語その
ものの内容説明に力を注ぐのは愚かである。寧ろそれだけで
は有害でしかない。」「世界最初の大小説、文芸日本の誇、そ
の書名と、作者と、作者の人物の偉さとを、強く深く児童の

脳裡に打込む事に努力を集中せよ」と訴えている。古典文学教材（西尾実）もやはり読本に古典教材が数多くとられて、我が国民教育史上注目すべき傾向」として賛美することを「我が国民教育史上注目すべき傾向」として賛美。低年齢からの古典学習は江戸時代以来の日本の読書教育の伝統であるとし、明治以降に主流となった児童の心理・能力の発達段階を考慮した教育観に対する批判を述べている。巻十一の短歌（森本治吉）は、詩歌教材「吉野山」「見渡せば」を取り上げ、美的概念を知的に操作した古今風の歌が多く、「現実の写象」「人生の真実観」を語った万葉集の歌が乏しいことを批判する。虫の声（山本善太郎）は、鬼貫・芭蕉・蕪村の句を取めた「虫の声」について、各句の選択の基準が判然としなないとし、これでは和歌との大きな差異である「俳味」を教えることが難しいと述べる。

国語教育時評（石井庄司）は「小学国語読本巻十一を手にして」を副題とする。新読本を称賛する立場から、中等学校の国語教師や他の教科の教師らがこの読本に目を通し、日本語に対する認識を新たにすることを勧める。また、「古事記の話」が単なる書誌学的解説にとどまらず、「国語の尊重」を力説するに至っていることを評価。「源氏物語」「法隆寺」「日本刀」などの教材への賛美も付されている。

新刊紹介は島津久基「国文朗読（レコード）」（日本コロムビア蓄音器商会）と垣内先生還暦記念論文編纂委員会編「日本文学論攷」（文学社）を扱う。前者は島津自らが平家物語

の「都落」と「待賢門の戦」を吹き込んだもの。篠原利逸の紹介で、「その目標を文学の鑑賞教育に於ける点に於て、巷間流布の朗読とは、凡そその趣を異にしてゐる」とし、その「詩味の偉大性」を絶賛。続けて源氏物語の「須磨」と平家物語の「大原御幸」のレコードが発売予定であることにも言及。後者は三十三篇の論文と垣内の著作論文発表年譜を収めたもので、紹介者の野島秀義は「国文学界における記念すべき出版」と記す。

◇第五号

《表紙目次》

第一卷 第五号 昭和十三年 五月号	
卷頭言	藤村 作 (二)
初等教育と国文法	福井久蔵 (三)
国語の訓練	湯澤幸吉郎 (九)
国語教育試論	(一六)
稲田伊之助	滑川道夫
大野 静	藤原與一
塚本勝義	山内才次
国語教育時評	西尾 実 (二二)
小松教訓の事	塩田良平 (二五)
国語教育学会消息	(二八)

《執筆者紹介》 p 28》

稲田伊之助氏 愛媛県立西條中学校教諭

大野 静氏 愛媛県女子師範学校附属小学校主事

塩田良平氏 二松学舎専門学校教授

塚本勝義氏 茨城県立水戸中学校教諭

滑川道夫氏 成城学園訓導

西尾 実氏 東京女子大学教授・本会常務理事

藤村 作氏 東京帝国大学名誉教授・文学博士・本会会長

藤原與一氏 広島文理科大学助手

福井久蔵氏 文学博士・本会顧問

山内才次氏 東京高等師範学校附属小学校訓導

湯澤幸吉郎氏 東洋大学教授

《国語教育学会消息》

国語教育学会理事会／国語教育学会事務所変更／国語教育学会
会研究部例会／小学国語読本総合研究卷十一 上巻・下巻

《奥付 p 29（裏表紙見返し）》

昭和十三年五月五日印刷発行

昭和十三年五月十日発行

※以下、前号と同じ。

（第一巻第五号）

《広告》

国語教育学会編『小学国語読本総合研究』卷一、三、五、七、

九、十一 岩波書店（p 21）

前田河広一郎『蘆花伝』 岩波書店（裏表紙）

《記載内容概要》

巻頭言の教育年限短縮論について（藤村作）は、自国文化に加えて西洋文化を学ばねはならないのだから、日本の修業年限が長いのは当然と主張。

初等教育と国文法（福井久蔵）は、敬語表現や枕詞・序詞・縁語などの修辭、文の形態（陳述体・記述体）などに関する文法教育を初等教育の早い段階から行うことを主張するもの。

国語の訓練（湯澤幸吉郎）は、自己の中学校教師体験を例に、話しぶりを相手によって変える訓練が必要であることを述べ、小学国語読本の表現には「ワタクシ」等子供の言葉としては不自然なものが目につくとする。現代口語の実態を深く認識した上で、責任を持って言語教育を行うのが教育者の役割であるとも主張。

国語教育試論は六編のコラム的文章からなる。新しさ（稲田伊之助）は、古典重視の新読本卷十一を絶賛する感情的な文章。覚習（大野静）は、黒田亮の「動作及意志過程に於ける勘」の説を垣内松三の「読みに於ける直観・自證・反自證

の「三展開」と結びつけて論じ、「読書百遍意自通」という発想を「東洋的芸能に於ける特に日本的な修練道」として評価するもの。国語教育の領域（塚本勝義）は、文語教育には熱心であっても口語教育に対しては不熱心な国語教育の現状を批判し、聞き方・話し方の指導実践に力を入れるべきだとする。実用主義的動向（滑川道夫）は、「現在の非常時局に際会しての日本的自覚は児童の生活からかけはなれた観念的な右往左往の教育に決別を与へてより現実的に生活への適応と建設とを要請している」という認識を前提として綴方教育に言及。自らの主張する「実用主義」は「大人の生活のため」の形式的実用性ではなく、「児童の生活の発展に役立つ」ものであり、「生活構成の綴方教育」とも称せられるものだとする。国語学の国語教育的再建（藤原與一）は、国語学研究の在り方について、国語教育学と一体化して、「言語に対して生活語としての観方を徹底」していくよう要請するもの。豆腐製作と文章の構造（山内才次）は、「文章の表現過程乃至は文章の構造」について、「未だ分れざる全体的体験」が「創作的理性」によつて「想化せられ、形を得て表現せられる」ものであることを比喩的に述べたもの。

国語教育時評（西尾実）は、芦田恵之助の「教式」について論じている。教育現場においては「教師の教材研究の方法論から見出されて来た所謂指導過程（通読・精読・達読）の外に、児童の学習そのものから必然的に要求せらるべきもの

を究め」なくてはならないという立場から、芦田の「七変化」の教式を「話しあひ」「書く」「とく」の三次的展開として把握し、そこには「単なる頭の理論から割出した公式ではなく、実践から得た知識の結晶たる特色が示されてゐる」とする。小松教訓の事（塩田良平）は、塩田の亡父が臨終の折に、平家物語の中で小松重盛が教訓（最も重きは朝恩なり）を述べるところを読んで聞かせるよう求めた思い出を述べたもの。

◇第六号

《表紙目次》

第一卷 第六号 昭和十三年 六月号	
卷頭言	藤村 作(二)
古事記の開闢神話の意義	次田 潤(三)
国語の正確な認識	山岸徳平(七)
国語教育試論	(二四)
註解の位置	西尾 実
註解の実際問題	野島秀義
註解に於ける一つの問題	篠原利逸
国語教育時評	大久保正太郎(二〇)
新刊紹介	(二六)
国語教育学会消息	(二七)

《執筆者紹介》 p 19》

大久保正太郎氏 東京市本郷区第一実業女学校教諭

次田 潤氏 第一高等学校教授・本会評議委員

篠原利逸氏 東京市神谷小学校訓導

藤村 作氏 東京帝国大学名誉教授・文学博士・本会会長

西尾 実氏 東京女子大学教授・本会常務理事

野島秀義氏 東京市汐見小学校訓導

山岸徳平氏 東京文理科大学教授・本会評議員

《国語教育学会消息》

齊藤清衛新文学博士／国語教育学会理事会／国語教育学会研

究部例会

《奥付 p 27 (裏表紙見返し)》

昭和十三年六月五日印刷発行

昭和十三年六月十日発行

(第一巻第六号)

※以下、前号と同じ。

《広告》

津田左右吉著『儒教の実践道徳』、武内義雄『支那思想史』

岩波書店(裏表紙)

《記載内容概要》

巻頭言の作文の虐待(藤村作)は、中等・高等学校での作文教育の実態を嘆き、国語教師の負担を減らして作文指導が十分にできるような配慮を「学政の当局者」に要求するもの。

古事記の開闢神話の意義(次田潤)は、古事記の冒頭の一章は「古事記に於て終始強調せられてゐる古代日本民族の、信仰に基づく国家的精神を掴む上に、最も貴い意義をもつてゐる」とする。その意義とは、「種々の点に於て、後に語る、国生及び神生の神話に始まり、天孫の降臨で一段落を告げる、世界無比の国体神話の序説となつてゐる」ことにあると結論付けてゐる。

国語の正確な認識(山岸徳平)は、国語の教授者に対して「語の意義や文法に関する明確な理解」すなわち「意義字や文法学方面の理解」が必要であると主張するもの。とりわけ古文解釈に重点を置き、枕草子を例に、助詞助動詞の一つ一つについての正確な知識の重要性を説いている。

国語教育試論は注解論の副題の下に三篇の小論を収める。注解の位置(西尾実)は、教師は児童に対して各自が辞書・参考書を個別に活用できるところまで「注解」の指導をすべきであるとし、その重要性を主張するもの。それがおろそかにされているのは、かつての読み方指導において訓詁注釈を排撃した時代の弊害であるとする。注解の実際問題(野島秀義)もまた従来の「内容主義の読み」を批判し、「注解」の

重要性を説く。そして、自らが教室において実践している五つの方法を紹介している。註解に於ける一つの問題(篠原利逸)は、西尾の「読方教育論」を引用しつつ先の西尾の「註解の位置」とほぼ同様な主張をし、家庭や学校に辞書を配備することが急務だとする。また、朝日新聞において林達夫が主張した「虎の巻全廢論」にも賛意を示している。

国語教育時評(大久保正太郎)は、綴方教育・読方教育・言語教育・国語教説論の四章からなる。綴方教育については、生活教育座談会(教育五月号)を取り上げて生活主義の綴方教育の推進者と批判的な論者との論争を紹介し、城戸幡太郎の主張を引用して「社会生活との結びつきの上に正しく捉へられた言語生活を規定とする綴方の道」を推奨する。高倉テルの綴り方教育の本質(教育六月号)は芸術的傾向の強い綴方指導への批判として、黒瀧成至の綴り方教育の新しい出発(教育五月号)・滑川道夫の生活綴方の問題史的検討(教育五月号)・波多野完治の生産主義教育論(同)は、いずれも生活指導と綴方指導との一体化を目指す方向性のものとして紹介されている。読方教育については、「現行読本の教材は十分な検討批判を必要とする」という立場から、その表現が児童の現実生活から乖離していることを指摘した上田庄三郎の国語教師論(教育・国語教育五月号)を評価。言語教育については、長谷川如是閑の言語の教育(教育・国語教育六月号)・黒瀧成至の国語教育の基礎問題(教育・国語教育四月

号から連載)を紹介し、それをふまえて「言語教育こそ国語教育の基底である、といふ自覚をはつきりさせることが緊要」と主張する。そして、国語教師論が多く論じられているとして、上田庄三郎の国語教師論(教育・国語教育六月号)・鈴木睿順の国語教師論(教育・国語教育臨時号)・野村芳兵衛の綴方教師と児童観の問題(教育・国語教育)・百田宗治の綴方・綴方教育・綴方教師(日本評論五月号)および先の黒瀧・波多野論文を紹介。

新刊紹介では恵雨会編『国語教育道』(同志同行社)を篠原利逸が紹介。垣内松三の華甲記念出版で、その内容は、序文(菅田恵之助)と新読本の出現と意義(井上尠)・初等教育に於ける師の御功績(菅田)・教壇釈迦(菅田恵之助指導、青山廣志筆録)・真実の教育を求めて(沖垣寛)・極深研幾(古田拙)の六項から成る。教室での実践記録である「教壇釈迦」をはじめ垣内学説の具体的実践化の試みとして高く評価している。

(とうとう・ゆたか 本学教授) (統)